小説
空蝉×Amanita
挿絵
立ち読み版
お嬢様は妄想厨!?
幼馴染といちゃエロ性活

序　幕　どうしてこんなことに……波乱の幕開け　006
第一幕　ヤられるまえに……やるしかないんだから！　013
第二幕　ふたりきりの休日なんて……危険がピンチで危ないわ！　073
第三幕　本当の気持ち　129
第四幕　いつまでも……どこまでも！　194
最終幕　あなたを抱き留める、家のように　249

登場人物紹介

Characters

五月胤（さつきだね） 皐月（さつき）

事業の失敗で元セレブとなったお嬢様。基本的には才色兼備のパーフェクトお嬢様だが、幼馴染の直樹に対しては理不尽な態度を取ったり素の部分を見せる。また「妄想癖」があり……？

本城（ほんじょう） 直樹（なおき）

幼少時から皐月と家族ぐるみで付き合っている。一見クールだが、ちょっとムッツリな一般男子。

「さ、さぁ。早く全部膿を出しきるのよ……！」
「むぶぁひふもごごご」
無茶言うな。そう、口元に被さるアンスコのフリルに邪魔されながら、伝えたつもりだ。ずっと昔から知っている幼馴染の尻が顔に乗っている。そんな状況で扱かれ続ける肉棒が最終的にどうなるか、容易に想像できてしまったがために、声には切迫した思いをたっぷりと乗せた。
「ぁ、ふぁっ……も、もぅじっとしてなさいっ……や、ぁん」
だのに、まったく伝わってないらしい少女の尻はこそばゆさに揺れ動き。
（は、鼻が折れるっ。なんて、声出してるんだよ……！）
結果的に皐月の甘い声を聞かされたことで、ふたつの手のひらの内に収まる肉の幹は、よけいに筋張って、鼓動を速めてしまった。
「す、すご……男の子って、こうなるんだ……」
（だ、だから息をかけんなっ……くぅ、うぉぉっ！）
指の隙間から亀頭へと吹きつける、熱っぽい吐息の強さはそのまま彼女の顔と亀頭との距離の近さを示している。考え始めたが最後、脳裏には剥き出しのペニスをしげしげと見つめているであろう幼馴染の様子が、ありありと浮かび上がってきて。
――びくんっ！
「っひゃ……な、なに。もう、出そう……なの？」

不覚にも、激しく肉の幹をたぎらせてしまった。乱れ、速まる呼吸に合わせて、脈動もどんどん強まり、亀頭を覆う指の隙間から飛び出るほどの量、先走り汁を吐いてしまう。
「うぅ、ニチャニチャするぅ。これが精液なの？」
違う。いや、そうだと言って騙し、この場を切り抜けるべきか。でも――。
「……っ！」
しきりに切なさを訴え脈打つ聞かん棒は、行為の中断を少しも望んでないようだった。
（くそっ……また、息が続かなく……）
まくれ上がったスカートの下。鼻先をくすぐるフリルが、今この時ばかりは疎ましい。乗っかる臀部の丸みに沿ってどうにか抜け出せないか足掻いてみたものの。
「んっ！　ぁ、こらぁっ……動くなって、言った、のにぃっ……！」
やはりただ、皐月の甘い鳴き声を導き出しただけで終わる。嬌声――そう呼ぶにふさわしい熱っぽさと蕩けた響きを備えた幼馴染の声は、まるで溶け込むように腰の真底まで轟き、加速度的に肉の猛りを増進した。
（や、ばい……意識が。あ、ぁ、よだれまで垂らして……だらしねぇなぁ俺）
血液が股間に集中したことで、ますます意識が遠のき、視界が霞む。最初、口元に感じた湿り気は、失神直前の己が漏らした唾液なのだと、そう感じた。
だが、一拍遅れて舌に甘みを伝えてきたその蜜液は、明らかに唾液の味わいなどでなく。
「くぅ、んっ……なん、だか、っ……ムズムズ、っ、ゃぁ、んっ……」

いつしか腰をくねらせ始めた皐月の声が、より露骨な響きへと変容していく。腹部にのしかかるふくよかなふたつの膨らみも、押し潰れる勢いですり寄ってきて、その丸みと熱気、弾力を、テニスウェア越しにも鮮烈に感じ取ることができた。

（皐月の……お、おっぱ……はぐぅっ！）

ごく自然な流れで脳裏に胸丸出しの皐月が無邪気に微笑（ほほえ）んでいる様が投影され（表情は十年前お医者さんごっこに興じた際のそれだったが、外見は現在の皐月に準じていた。ただし丸出しおっぱいの細部のみ想像の産物）、鼻の奥で血がたぎるのを予感する。

にゅちゃっ、ねちゅっ、ぐち、にゅりゅるっ……。

「……っ、もぅっ。お汁が絡まって上手に擦れないじゃないっ……」

粘着質な水音とともに、密着感と滑りの増した摩擦刺激が勃起に襲い掛かっては、絡まり、すり込まれて、その都度、筋の張った幹は情けなく脈を放ち、また新たな先走りの蜜を噴き上げた。同時に背中を奔（はし）り抜けて頭のてっぺんにまで、しびれる様な愉悦の波が到来する。

「つぐ、ぅぉっ……！」

――ぐんっ！

「はぷっ⁉」

辛抱たまらなくなり、思わず腰を跳ね上げた。その切っ先の先端に、なにやら湿った、それでいて弾力に富んだ物体がぶつかる。ムチュッとたわんで健気に押し返してきたソレ

の中央には空洞があったようで、這い出てきた何かに亀頭が押され、弾かれたのだ。
「っは！　っ、ぅぅ……さ、つき……？」
いったい何に触れているんだ俺は？
相変わらず甘酸っぱい臭気と汁気を含む尻圧（ケツ）に押し潰され、身動きできないでいる顔面を向ける代わりに、くぐもった声だけでどうにか問いかけようと試行する。
問いかけた相手である、その皐月は。
「んっ……！　うぇぇ……なんか口の中、ヌルヌルしてるよぉっ」
先走りを含んでしまったらしい口元を拭い拭い。今にも泣き出しそうな声を上げていた。
（……つまり。要するに。俺のちんこと、さっきぶつかったのは）
皐月の、唇か――!?
「う～……ファーストキスもまだなのにぃ」
――びぐんっ！
まだ誰も。他の男の触れてない場所に、あろうことか性器で触れた。皐月の初めてのキスを、ペニスで奪ってしまったのだ。そう思ってしまった瞬間に、嬉々として脈動が――肉の悦びとともに弾け、轟き、膨張して。そして、完全にたがを外されてしまった。
にゅるっ、にゅっ……にゅぶづっ！
「ぇ……ちょ、ちょっと勝手にっ」
不慮のキスに驚き止まってしまった幼馴染の手に再始動を促すように、腰を突き上げ、

進んで摩擦快楽を貪ってゆく。
（我慢なんか、できるかよ……！）
据え膳食わぬは男の恥だ。とはいえ最後までするわけじゃない。あくまで挑発に乗ってやって、一発。このまま出してしまうだけのこと。それだけの、はずなのに――。
（なんでこんなに……！）
底なしに昂奮が高まって、息詰まりそうなほど胸が期待に満ちてしまうのか。
「ま、負けないわよっ！」
すでに当初の目的をどこかへやってしまったらしい皐月が、こちらの行動を挑発と受け止め、あわててコスコス。手による愛撫を再開させる。
にゅぢゃっ！　にぢゅぢゅ！　ぐちゅっ……ぬにゅぢっ！
先走りが、滴るそばからすくい取られ、そのまま肉の幹へとすり込まれていった。
（ちくしょ……うっ！　ま、まだまだぁぁっ……）
腰の芯がジンとしびれ、早くも肉欲の塊が迫り出してくるのを感じる。
つたなかった少女の手つきは早くも慣れ始め、手首にスナップまで利かせて的確にクリクリと、肉の傘の部分を、裏表隈なく重点的に攻めてくる。突き上げる腰の動きに合わせて擦り続ける少女の指を弾く勢いでドクリ――いっそう強い悦楽の鼓動が、響き渡る。
やせ我慢は、もうそれほど続けられそうもなかった。
「うぐ……ふー、ふぅぅッ……ぶぢゅっ！」

そう直感した直後、自然とアンスコへとむしゃぶりつき。
「ひゃ……あっ!?　ば、ばか。何……くふっ、うぅぅんっ！」
――づぞるるるるっ!!
彼女がきっと顔中真っ赤にして恥ずかしがるであろうとわかっていて、わざと盛大な音を立て、啜り上げてやった。
皐月の声の響きがさらに一段。とろみと熱っぽさを増し、顔面上を這いずる尻の動きもより活発に、遠慮をなくして大胆に前後、左右にくねり始める。
（どうだ、これでおあいこ……っぬぅぉぁ!?）
勝てないまでも相打ちには持ち込めそうだと、安心して腹から力を抜き、快感に身をゆだねかけたのが、よくなかった。
そのタイミングをまるで狙っていたかのように、皐月は次なる手を打ち出してくる。
「れるっ……ん……っ！　負け、ないんだからぁっ」
ぽた、ぼたっ……にちゅにちゅにちゅっ！
ついさっき亀頭とキスした唇から、唾液が滴り、たっぷり幹に降り注ぎ。ニチャニチャネチャネチャと淫猥な音色ごと、隅々まで粘り気がすり込まれていった。
「……っふァ……～～ッッ！」
思わず漏れ出かけた女みたいに上ずる裏声を、どうにかこうにか噛み締めた唇の奥にとどめるので精一杯だ。唾と一緒に飲み下した甘美の証（あかし）は、熱をこもらせたまま胃を下り、

腹の底に溜まり積もって、一気に、針を刺された風船のごとく破裂する。
「はぷ……ちゅ……っ！」
とどめとばかりに、唾液をたらしたばかりの皐月の舌が今度は股の付け根あたりを這い進み、腿に繰り返しキスの雨を浴びせられる。
「んぶッッ！　んっんん――――っ！」
皐月、皐月、皐月――！
なぜだか頭の中で何度も何度も幼馴染の名を呼んでいた。腰の芯を蕩かせる熱源から気を逸らすため、口元に含んだ布地に、染んだ汁気を吸いきる勢いでむしゃぶりつく。
ぢゅづっ、づぢゅちゅつつっ、こく、こくんっ……。
（やっぱ、甘ぇ……）
ヌルつく蜜液を、染み出るそばから啜り、喉を鳴らして嚥下する。美味いと感じるわけでもないのに、舌はさらに求めるように蠢き、股布付近をなで擦り。
「ひゃぁんっ、へ、変態っ！　ばかばかばかぁぁあふァァッ……！」
罵倒から嬌声へと目まぐるしく変化する皐月の声音。震えながら音階を上げるその響きまでもが再度、腰の底に轟いてきて、一足飛びにのぼせた脳裏が白みかける。
荒い鼻息に煽られ、尿道から垂れた先走りがまた幹に絡み、即座に少女の唾液と攪拌。
いやらしい音色とともに塗り込められていった。
（も、ぉ……無理、だっ……！）

少女の重みと柔らかさを存分に感じつつ、尻が持ち上がる。また自ら腰を振って、皐月の手の動きと同調し、ズクズクと甘く幹内部に響く摩擦快楽を貪りながら、同時に息を止め、皐月の尻の谷間をこれでもかと全力でなめしゃぶってやった。

「やっァァァ……あ〜〜〜っ！」

愛撫に応じてリズミカルに流れるメロディが小気味よく、悪乗りした舌が少女の菊座をアンスコ越しに突き上げた。

ぎゅぎゅぅぅっ！

当てずっぽうの悪戯のつもりが、見事に舌先はすぼまった凹みを一発で捉え、触れた途端にその部分がいっそうすぼまるのを感じたのと同時に。

「うぁっ……！」

強めに握られた肉の竿が、歓喜の声と脈動をほとばしらせた。大量にすり込まれた潤滑油のせいもあって圧力は緩和され、ただひたすら手の温みに包まれる喜びと、ほどよい圧迫がもたらす肉の悦びとに浸される。

（また……甘い、汁……っ！）

口元に蜜液がにじむのを察して、即座に股布ごと吸い上げた。もう、鼻の頭は皐月の蜜でテカリっぱなし。ヌルヌルと舌に絡まりながら、蜜が胃の中を下ってゆく。

「もっ……早く、早くっ、出して……ぇっ！」

あの皐月が。負けん気ばかり強く、わがままで、世間知らずな——自他共に認める優等

生な彼女。学園中の憧れの的である幼馴染の少女が、射精してくれと懇願している、

「もがっ……つぐ、ぅぅうっ……！」

状況を意識するほどに、へその裏あたりに溜まった肉欲のマグマは煮沸した。

ぬかるみを巻き込むように上下にスライドする少女の指に煽られて、堪えに堪えた肉欲のたぎりが肉竿の内部を駆け上がり。

ぷちゅぅっ――。

「ぷぁ、むっ……もごもがっ！」

鼻先に強く、布地に染んだ蜜が弾け散るほど強く少女の尻が押し当たる。

反射的になめしゃぶったその桃肉は、震えながらも決して離れようとせず。積極的に摩擦を愉しんではまた、真新しい蜜を漏らし、弾んだ。

ど、くんっ――。

（も、もぅだめだっ……出、るッ……！）

とろみと甘苦しい少女の体臭とを同時に吸い込んだ瞬間、執拗にカリ首を扱かれて、ついに我慢比べも終焉の時を迎える。

「出してっ……くぅ、んっ、ァ……早、くぅぅ……ンンッッ！」

ピクピクと、鼻先に感じる股布の向こうの肉が震えている。そう感じたのと、ほぼ同時に。煮えたぎる情欲のマグマが肉竿を揺さぶりながら暴発した。

（皐月っ、皐月の手にっ……この、まま……ッッ‼　〜〜〜ッッ‼）

第三幕　本当の気持ち　～その一～

田中にもらった無修正のエロ本で見たのとは比べ物にならないくらい、こぢんまりとしていて、形だってずっと綺麗だ。

気づけば手が伸びていて、ハッと意識を取り戻した瞬間にはもう指先がプニュリと柔らかな肉感に触れてしまっていた。

「ひゃうっ！　ば、ばかぁっ。触っていいなんて、まだ……」

「まだ……ってことは、い……いいんだな？」

目で問いながら、指先を健気に押し返すしてくる肉感に感動し、止められなくなる。尻に触れた時とはまた違う、ほどよい肉づきと指腹に吸いつくみたいな感覚の心地よさ。触れているそばからにじむ汗も、熱に溶けて密着度と昂奮を高めてくれる。

「ふぅっ、ふ……っ。す、すまんっ」

みっともないくらいに鼻息も荒らぐ。一応謝りはしたものの、指は離すに忍びなく、名残惜しげに少女の股座に貼りつかせたまま、皐月の腰を抱いて引き寄せ、自身の腰は再度便座へと下ろして、まだ律儀にスカートをつまんで開帳してくれている少女の股間へと、顔を寄せる。

「ち、近い近いぃぃっ。ふぁ……！」

間近で見れば見るほどに皐月の股間はすべやかで、絶妙なカーブを描く下腹部がこの上なく魅力的に思えた。

鼻息に煽られて少女の陰毛が幾本か、貼りついていた陰唇から剥がれてふわりと揺れる。

その湿り気を帯びた毛先にくすぐられて、ますます意識は鼻先へと集中し、ついに割れ目との距離一センチほどにまで肉薄する。
「すぅ、はぁっ……」
「嗅ぐなにおうな！　やっ……！　ゆ、指モゾモゾさせるのもだめぇっ……」
すでに完全に攻守は逆転していた。肺一杯に吸った少女の香りを頭の中で分析する。
（甘酸っぱくって、少し汗のニオイも……これが皐月の……ニオイっ……！）
ドグンとひと際強烈な衝動に見舞われて、肉の棒が硬直。際限のない膨張を繰り返す。
「ず、ずるいわよっ、そっちばっか……ぁぁっ」
語尾を甘くかすれさせながら、幼馴染の少女が鳴く。
（そっちこそ……ずりぃんだよっ！）
そんな声聞かされたら、我慢なんてできるはずないじゃないか――。内心で毒づき、そして。躊躇なく、蜜のニオイを染ませている割れ目へと口づけた。
「ぢゅづぅっ！」
「ひやぁわ⁉　な、なにっ、して……んひゃ、あぅぅんっ！」
舌で濡れた恥毛を掻き分け、丸裸となった肉の割れ目を上から下へ、下から上にと、掃くようになめ扱く。瞬く間にあふれてきた蜜液を啜れば、プルプルと小刻みに震える少女の股肉の反応が伝わって、塗り込めた唾液の分だけ、じわじわ愛しさがあふれる。
「……ん、く。んっ、んく……」

口の中に溜まった液を飲み下すと、甘酸っぱい味わいと多少ヌルつきの強い喉越しが胃袋の底へと滑り落ちていった。
「の、飲んだ……の？」
「はぶぶぶぶ、ぢゅぷ、んぶじゅぶぷ」
飲まないと息が詰まるだろ、と言いたかったのだが、口づけたままだったせいでただ単にモゴモゴとくぐもった声が漏れてしまう。声の振動に揺さぶられる皐月の恥肉がまた弾んでは鼻先をちょんちょんくすぐってくれて、身も心もむず痒い思いをする。
「ひゃぅ！　く、口くっつけたまましゃべるなぁっ」
おまけによけい声を甘く蕩けさせるものだから、肉棒が際限なく膨張してしまう。
腰を引くべきか、持ち上げるべきか。どちらのほうがより快楽を貪れるかを考えながら、もじつく幼馴染の腰を掻き抱いて、さらなる蜜液を啜り飲む。
（美味く……はないんだけど、なんか癖になってきた、かも……ゴクッ）
「ま、また飲んだぁっ……」
これほど皐月を一方的に攻められる機会などそうあるものではない。それに、恥じらい攻め入られる一方の幼馴染の姿は新鮮で、また新たなときめきを胸の奥に点してもくれた。
「れぢゅっ……ぁぷっ……ちゅ、ちゅっ、ちゅづっ！」
最初は割れ目をなぞるように動かしていた舌先を、徐々に割れ目の内側へとこじ入れていく。そうして粘膜からじかに真新しい蜜を搾り取り、柔らかなヒダに舌を包まれる歓待

を受け、彼女が快感を得ていることを知る。
「ひぅ、っあ！　あぅぅんっ！　ば、ばかばかぁっ……」
逐一反応を示してくれることが嬉しくて、高鳴りっぱなしの胸がますます熱くなり――角度や強弱を変えて粘膜を突っつき、一番皐月が感じる場所を探ろうと躍起だった。
そうこうするうち、舌先がツンと硬く尖って存在を主張する割れ目の上端――皮を被った豆粒のような器官へと行き当たる。
「っひ……ぅ！　そ、そこはぁっ」
これまででもっとも顕著な反応。膝を震わせ、立ってるのも辛いとばかりに上体を前のめりに倒してきた。両の瞳は溜まった涙で濡れきらめき、半開きの口からよだれがこぼれるのを堪える余裕すら、なくしてしまっている。
（ここが、一番感じるんだ……！）
ウニ九郎の試着室でした時に輪をかけて締まりのない、けれどひどく惹きつけられる表情に、また一オクターブ、心拍音が高くなる。同時に血液の集まった肉の棒が刺激を求め腰ごと持ち上がり、尻の下の便座を派手にガタンと鳴らしてしまった。
このまま攻め続ければ、早々と皐月は絶頂に達するだろう。歓喜に咽ぶ彼女の手が止まってしまっていて、一緒に最高潮の瞬間を迎えられそうもないのが残念ではあるけれど、それでも――皐月をイかせられる。そのことがたまらなく嬉しくて舌を蠢かせ続ける。
（このまま……ラストスパートだっ）

決意も固く鼻で息を吸い込み、揺れる恥毛を目の端に留めつつ舌で皐月の勃起した豆粒を――クリトリスを突こうとした、次の瞬間。

ばたばたと駆けてくる足音が、耳朶に届いた。

「ふ、ぇ……？　ぁ……やっ」

「お、おい皐月っ」

気配を察知したのは、ドアの側にいる幼馴染のほうが若干早かったらしい。あわてた拍子につんのめり前に転びかけた彼女を、立ち上がって支え、抱き寄せる。蜜液で濡れた唇と、よだれで湿る唇とが急接近。

「……ぁ」

不意に、おたがいの視線がぶつかった。

「う～、やばやばっ」

予想通り女子トイレに駆け込んできた女子生徒らしき声と足音が、勢いよく隣の個室へと入ってゆく。

（ど、どうしよう）

（いや、俺に聞かれても。……じっと待つしか、ないだろ）

ばたんと閉まる戸の音。その余韻を聞き留めつつヒソヒソ言葉を交わす間も、隣の部屋に漏れ聞こえるのではないかと冷や冷やする。

快楽を中断させられた肉棒が、ヒクヒクと揺らいでは己の下腹部にピタンとぶつかった

反動で今度は皐月の腹部をペチペチ叩いてしまった。
（こ、この節操なし！　どスケベ！　場をわきまえなさいよっ）
場をわきまえろと言われても、そもそも女子トイレに連れ込まれている状況そのものが異常なのだが――なんて反論する、その代わりに。
（そっちこそ、股から汁漏れっぱなしじゃんかっ）
先刻、抱き寄せた瞬間から感知していた状況を告げてやる。ついでに、その汁濡れた股間を若干立て気味のこちらの右ひざに、皐月自ら腰を揺らし擦りつけていることも余さず報告。
（……ッッ～～～⁉　な、な、なななななっなに言ってるのよぉっ）
案の定、図星を指された少女は耳まで真っ赤にプンプンと怒り出す。そのくせ腰の動きは止めないで、いまだ漏れる蜜を人の膝にすり込んでいた。
（こ、これはあんたのよだれでしょうっ。だ、だから早く拭かなくちゃって……お、思っ……て、あっ、あんたの膝でぇ……っぁ、あふぅぅ……♥）
その蕩けふやけた鳴き声と、今にも泣き出しそうなくらいトロトロの表情とで、どんな言い訳も台無しだ。
ジャァァ……。隣室からは、排泄中の音を聞かれまいとする水洗音が延々と流れ、聞こえてくる。見知らぬ彼女は、当然のように鍵のかかった個室をドアの外から確認し、隣室に誰かがいるということを知っていることだろう。

響く水音は、壁の向こうからの目と耳をいっそう意識させた。
（う、動かないでよっ……隣にばれちゃう……んっ、んぁ、ぁっ……）
言葉と裏腹に、ますます強く腰を振って股間を押しつけてくる皐月。
（だ、っからぁっ……動いてるのはそっち……！）
見つかるかも、という危機的状況に昂奮しているのか？　だとしたら――不本意ながら、気持ちは共有できていると言わざるを得ない。
「ただでさえ顔が怖いんだから。見つかっちゃったら、な、直樹はレイプ魔の烙印を押されちゃうんだからぁ……っ」
「俺だけかよっ……」
相変わらず都合のいい突飛妄想にひた走る少女の太ももが、声を絞れとばかりにきつく締めつけてくる。
染み出す蜜の温みと、しなやかながら肉の乗った内腿に挟まれる心地よさ。辛抱たまらない気持ちをよっぽど大声で吐き出したい衝動に駆られたものの、隣室の生徒の存在が気になってぐっと呑み込み、我慢の子を続けさせられる。
皐月の両手はこちらの首に巻きついていて、一向に動く気配が見られず。放置された肉の棒がしきりに脈打って、刺激をくれと訴えかけてくる。間近で感じる幼馴染の体温と呼吸と香りとが頭の芯と胸の奥へ行き渡り、煮えたぎりそうなほどの焦燥感に駆られ、つい皐月の腰を抱く手にも力がこもってしまった。

くちゅぅっ……。
「ふぁっ……！」
抱き寄せたことにより不測の刺激を浴びた細腰が浮き上がり、濡れそぼつ下の口からは卑猥な水音が、負けじと湿る上の唇からは抑えきれない甘い声を吐き漏らす。
（〜〜〜っ、も、もう……無理……だっ！）
何するの、とキッとにらんできた皐月の視線を尻目に、立てていた右ひざを引いて今度は泣き出しそうな表情へと彼女の顔を変化させる。ユルユルと腰を振りたてる様は、もう一時も我慢できないのだと言葉よりも雄弁に語りかけてきていた。
（……わかってる。すぐに……い、一緒にっ！）
息を吐く。皐月の漏らした吐息を一拍遅れて吸い込み、意を決す。
へそに貼りつきそうなほど屹立した肉の幹を、今しがたまで膝が埋めていた空間へと導き、そのまま。驚き目を剥いた少女が許諾の意思を示す前に、彼女の股下へと突き入れてやった。
「ひぁっ……!!」
予想以上に大きな声を漏らす皐月の肩が喜悦と緊張とで強張るのを目端に留め、その肩を抱き寄せて、胸板で口を塞ぐ。
「う、おぁっ……！」
自身、隣室の女子を気にかけて唇を噛み、懸命に歓喜の声を押し殺した。

（な、んだよ、これっ……手で、するのと全然っ……！）

ヌルリと湿った少女の股肉に挟まった幹が、左右からの肉感に押し潰されながら、その弾力に負けじと脈打つ。内腿による圧迫は柔い腿肉によって緩和され、汗と蜜とで濡れた肌に、まるで食(は)まれているかのような錯覚を覚えた。

ほんの少し腰を動かしただけで、ぶちまけてしまいそうだ。痙攣を始めた己の腰の奥に、瞬く間に白濁色のマグマが堆積していくのを感じ、予感する。

「っ、ぁ、ぁふぅぅ……っ！　な、直樹のばかぁぁっ……カチンコチン、なの、グ、グリグリぃ……熱いのが、伝染(うつ)っちゃう、よォ……」

今までに増して甘く、媚びるように紡がれたその声を耳にして、止まれなくなった。

ずにゅぅっ――。

「ゃ、んっ……ンッ！」

込み上げる射精欲を堪えて腰を押し出し、そのまま皐月の腰ごと前後に揺する。意図的に上方、幼馴染の股肉を意識して擦り立て、押し上げることも忘れなかった。

「す、げっ……ぇぁ、はっ、あぁぁっ」

「こ、声大きぃぃっ。ばれちゃう、んっ！　よォ……もぉ……んあぁっ♥」

どっちの声が大きかったのかは、じきにふたつの嬌声が混ざり合ったことで判別不能となる。おたがい、背筋をしびれさせる切ない衝動に突き動かされて、隣室をうかがいつつも積極的に腰を振った。

「うえぇぇんっ……」
「お、おい皐月⁉」
怒ったかと思えば今度はまるで子供のように泣きじゃくり始めてしまう。せわしないヤツだ。だが、感情の起伏が激しい分だけ想われていたのだと想像すれば、瞬時に愛しさへと昇華される。
愚図る彼女の頭をナデナデ。キャミソールから手を離して、さてどうしたものかとひと思案。
「ひっ……ぅ。……の」
「……？」
涙声で聞き取りづらく、耳を彼女の口元へ傾ける。一拍、二拍。幾度かしゃくり上げる少女の様をうかがった後。
「……恥ずかしい、から。脱がすなら、あ、灯りをっ……」
「あ、あぁ……！」
顔を両手のひらで覆って隠し、ささやいた。その皐月の言葉に応えていったんベッドを降りて部屋の照明を落とし、再度覆いかぶさって、ゆっくり、ゆっくりと。期待と緊張とをない交ぜに、キャミソールをめくり上げていく。
（お、おぉ……おおぉうっ）
意味を成さない感嘆のうめきだけが漏れ出ていった。目にした光景をどう表現すればよ

いものか、昂奮で煮沸する頭では思いつかない。
左右それぞれの膨らみの中央で、ツンと突き立つ桜色の乳頭。女の子の乳首をはっきりと目にするのは、初めてのことだった。
（ウニ九郎の試着室で……の時は密着しすぎてて、はっきりとは見られなかった。こんな風になってんだ、な……皐月の、お、おっぱい！）
支えを失った膨らみは左右の脇へと流れ、押し潰されるような形で楕円となり、呼吸のリズムに合わせ密やかに息づいている。
「ふ、ぁ……っ！」
壊れ物を扱うような手つきで、左右同時に手のひらを被せた。そのまま搾り出すように乳肌を収め、ゆっくり、馴染ませるように乳肌と手のひらを擦り合わす。
「柔らかい……な」
「あ、当たり前……でしょっ、や、ぁんっ、ぁ、あぅぅ」
感動のあまり、短い単語しか頭に浮かんでこなかったのだ。いまだ煮沸は続いていて、少女に手放されて久しい肉棒が、ズボンの奥でぺちぺちと自身の腹を叩きわななく。
指がどこまでも沈み込んでいきそうに思うほど、皐月の胸は柔らかい。ボリュームは手のひらに収まるくらいで、厚すぎず薄すぎず。なのに弾力に富んでいて、健気に指腹を押し返してくる。
「も、もうっ、む、胸ばっかりぃっ……ふゃっ、あっあぁんっ」

無我夢中になってなぞり、なで擦り、もみほぐしては、きめ細やかな乳肌に耽溺（たんでき）する。
「な、なめても……」
「き、聞かないでよっ、そんなこ……ひぁぁ!?」
はぷ――。返事を聞いたか聞かないかのタイミングで、お預けを食った犬のように荒く吹かしていた鼻息ごと唇を右の乳首へと被せ、吸いついた。
（しょっぱい……皐月の、汗の……味。おっぱいの……味）
味がどうこう以前に、ずっと見知っている女の子に胸に吸いついた。味わいと触れ心地を知った。そんな状況そのものが独占欲と優越感を刺激して、ますます頭のてっぺんと腰の底を熱くたぎらせてくれる。
「やぁ、んぅ！　ナ、ナオ……赤ちゃん、みたい……っふ、あァァ……！」
出るはずもない母乳をねだるように、添えた手でそれぞれもみ込みながら、チュウチュウと音を立て、左右交互に吸い立てた。
（赤ん坊は、こんなエッチななめ方しないだろ……？）
唇で左の乳首をつまんで引っ張りながら、目だけで問いかける。
「くぅんんっ……の、伸びちゃうぅぅ」
（それに、赤ちゃんに吸われてエロい声出す母親も……多分いない）
咥えた乳首は左右とも、中に芯が入っているかと思うほど硬くしこって突き立っている。皐月がつたない愛撫でも感じてくれている、何よりの証。

「や……られてばっかじゃ、っ、ないんだからぁっ」
むぎゅうっ――。
「うくぉっ⁉」
愛しい人の反応に気をよくして脈打っていた股の膨らみを、やや乱暴な手つきで握られ、反射的に息を吐き、腰を引きかける。ズボンの生地ごと肉棒をつかんだ少女の手は、逃がさないと言わんばかりにしがみついて、離れかけた腰を引き戻す。
それから間髪容れず。スルスルと短パンの下から右手をこじ入れ、トランクスすらかいくぐって勃起をじかに握り締め。
「わぁ……硬ぁい……♥」
まるで宝石でも見つけたかのように目を輝かせ、小悪魔じみた微笑を浮かべる。
「こ、こら皐月っ、そ……んな、っ、ぁ、グニグニぃっ……」
攻守交代。攻め手に回った皐月の手がズボンへと突っ込まれているせいで、身をよじることすらままならない。――逃れたいとも思わなかった。
つ、つつつぅっ……。
「うぁっ……さ、さつきぃっ……」
包皮の部分をやんわりと扱かれ、歓喜の波が背筋に奔る。かと思えば剥き出しの亀頭に指腹を這わされ、突っついてはにじんだ先走りを塗り込められ、そのままニュルニュルと上下に擦られた。

（こ、こいつ上手くなって……るっ！）
「二回目だもん。ふふっ……ちゃぁんと前回の時に、ナオの弱いところはチェック済みなんだから……っちゅ」
びくびくんっ！
「くッ……あァ……ッッ⁉」
お返しとばかりシャツをめくられて、汗ばんだ乳首を吸い立てられる。
懐かしい愛称で呼ばれるたび、ともに過ごした十年の記憶が駆け巡り、皐月に対する愛情は加速度的に深まっていく。同時に、愛しい存在と睦み合っているという実感も喜びとともに増幅されて、瞬時に股間のたぎり――肉の悦びへと直結した。
「んふ♪　男の子も胸、感じるんだ……」
嬉しげにほくそ笑む唇に何度も食まれ、甘噛みされる、その都度、敏感な状態を維持する勃起ペニスも、派手に暴れて喜悦の鼓動を響かせてしまう。
「こんのぉっ……ちゅっ、ちうぅぅっ！」
「ふぇ……やはぁっ、あくっ、だ、だから乳首伸びちゃうってばぁぁっ……あぁぁん！」
放っておけばいつまでも愛撫し続けかねない皐月の頭を払いのけ、負けじと彼女の胸を吸い立てる。唾液をたっぷりまぶし、上唇と下唇とですり潰すみたいに乳首をこね回した。
ハァハァと、荒ぶる吐息が交錯する。目まぐるしく交代する攻守の果てに、おたがい示し合わせたかのように無言で見つめ合い、各々の下肢を包む衣服を脱がしていく。

「濡れてる……」
スカートと、湿ってべったり股肉に貼りついていたショーツを引き下ろして脱がし、その下から現れた肉の割れ目に、目を奪われる。
「そ、そっちこそ！　おち……ちん、おへそにくっつくくらいガチガチになってるじゃん」
慣れた手つきで短パンとトランクスをずり下げた皐月の視線も、先走りを滴らせ脈打つ肉の幹へと一直線に注がれていた。見られることでおたがい、ますます昂奮を露わに生殖器官をヒクつかせる。
「変態っぷりなら……互角だな」
「じょ、冗談っ。どう見てもナオの方が上ですぅ～」
相手を気遣いながらも減らず口を叩き合う。それも含めて「俺たちらしい」スキンシップ、愛し方だ。恥ずかしがる皐月を再度ベッドに押し倒して、ねだられるままキスをする。
「んっ、ふぁ、ちゅ、ちゅちゅぅっ……れちゅぅぅっ」
（……皐月の舌が、レロレロっ……て俺の……口の中、でっ……）
じゃれつかせた舌先同士が突っつき合う。おたがいの唾液が混ざり合い、グチグチといやらしい音色を奏でていた。唾液が糸引きながら絡まるのに合わせて、抱き合う身体と身体の体温も溶け合い、混ざり込んでいく。
くちゅっ……。
「ふぁ……っ」

「こ、ここでいいのか？」
軽く腰を振り、肉棒の先端で少女の股間を擦り尋ねた。シーツの上にばらけた皐月のサイドポニーテールが背筋を震わせた反動で揺れる。同様に揺らぎながら潤んだ瞳には勝気な輝きと、切なげな光とが混在していて――。
「し、知らないっ……ふぁ！　や、っ、こ、こら、あっあぁぁ……！」
甘い鳴き声に最後の後押しまでされて、つい意地悪をしてみたくなる。繰り返し繰り返し蜜まみれの割れ目を熱こもる肉の幹で擦り、染み出る先走りと蜜とを掻き混ぜてやった。触れ合う肩と肩、腹と腹同様に性器同士の熱も溶け合って、ますますおたがいの肌の境界線をあいまいなものにする。つながる前からすでに相手と一体になったかのような錯覚に襲われ、至福一色に胸の奥から塗り潰されていった。
視線を重ねながら――。ズッ――と浅く、勃起の突端が割れ目へと沈む。
「……ッ！　ァ……ッ、ァ……！」
瞳を瞬かせながら見開いて、口をぱくつかせた驚愕の表情で、皐月が声にならない喘ぎを、肉の棒が押し入る分だけ吐き漏らしていった。
（入って……く、皐月の、中にっ……）
恥ずかしがってなかなか開いてくれなかった幼馴染の脚を、内腿から順に手でなぞり、あやしながら、腰を少しずつ押し進めていく。亀頭で、ぬかるんだ肉の壁を左右に掻き分けていく感覚。カリ裏までが沈み入った段階で、早くも腰の底から頭の芯を白く染めるほ

どの熱量が迫り出してくる。
「ぅぐっ……！　い、痛くないか？」
唇を噛み締めて快楽を押し殺しながら涙目の彼女に問うた。このまま自分ひとり絶頂に達するなんて、男として情けないにもほどがある。それにやっぱり、ふたり一緒に気持ちよくなりたい。そう思うからこそ、彼女の状態が強く気にかかっていた。
「っ、ふぅ、うぅ……んっ、お……なかの中に、太いのがムリムリって、きてるぅ……」
痛みを我慢できないなら、今日はここまでにしよう――。涙声で顔を高潮させた皐月に、よっぽどそう告げるべきかと迷い始めた、矢先。
「……っぅぅぅ……だめぇっ」
乱れた呼吸を整えようともせずに、少女は両の脚をこちらの腰へと巻きつけ、しがみついて、明確に行為の中断を拒絶した。
「うぁっ⁉　さ、皐月……っ！」
腰を引き寄せられ、そのままズブズブと肉の棒が彼女の膣肉を割り裂いて埋まってゆく。薄い膜のようなものを引き裂いた――そう感じた次の瞬間には、コツリと亀頭が弾力のある肉の壁にぶち当たり、根元まですべて受け入れられていた。
（み、みっちりっ……し、絞られてるみてぇだっ……！）
窮屈な皐月の膣内は、肉棒一本でギチギチの満杯状態になってしまっている。おまけにひどく熱を持っていて、隙間なく絡み吸いついてくる肉壁の脈動に合わせて、その熱気が

肉の棒をキュッキュッと不規則に締め上げるのだ。
愛情満点の歓待に、せっかく一度抑制したはずの肉欲のマグマが呼び覚まされ、またズクズクと甘いうずきとともに肉の幹の内を駆け巡りだす。
「い、たっ……ぁぁっ……」
「ば、馬鹿。無茶すんなっ……」
肉の快楽と、愛しい人への配慮。ふたつの狭間で揺れながら。
「だ、だって……う、嬉しかったんだもんっ。だ、から……やめちゃ、ヤぁ……！」
「ぅく！　……わ、わかったから。だからそんなに急にキュウキュウっ……」
結局、根負けする形で皐月の意志を尊重することに決める。――嬉しいとまで言われてやめたら、それこそ男が廃る。痛みを堪えてでもつながっていたいと、そう想ってくれたことが素直に嬉しくて、悪いとは感じつつも少女の中で肉の幹を膨らませてしまった。
「そ、その代わり……お前が落ち着くまでは、このままだかんなっ」
無理をして、後に残る傷でも負わせては本末転倒だ。大事な人の身体も、心と同じくらい大切にしたい。
また、今激しく動かされると、肉棒の根元で煮えたぎる悦楽のマグマを堪えきれなくなる。そんな事情も理由の一端を担っていた。
「い、息吐け。まず」
「す、すぅ……はぁ。すぅ、は、ああぅぅ、お、お股に響くよぉっ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

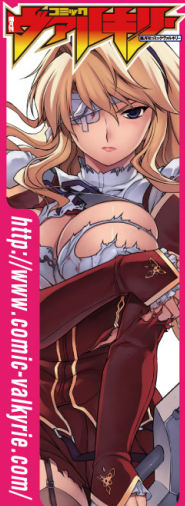
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！